様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０６１８

研究課題名（和文）日本語音声の独学を支援するための教師の技能と教材設計に関する研究

研究課題名（英文）The Study on teacher's skill and teaching materials for self study of Japanese pronunciation

研究代表者
河野　俊之（KAWANO, TOSHIYUKI）

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：６０２６９７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，自己モニターを活用した音声教育の研究成果をもとに，独学用の音声教育教材を作成した。それは，Moodleをプラットフォームとした，e-learning教材である。セキュリティーの問題などをクリアでき次第，公開する予定である。
また，その教材をより効果的に使用するためには，教師が持っているべき技能は何かを明らかにし，それらについて，『音声教育の実践』（くろしお出版）を2013年２月に出版した。

研究成果の概要（英文）：In this study, based on the research of Japanese pronunciation teaching utilizing self-monitoring, we have developed a pronunciation teaching material for self-study. It is an e-learning material which has a platform Moodle. It is expected to publish as soon as possible we can clear the problem of security.
In addition, the teacher's skill in order that the material is used more effectively was clarified. It was published in "Onseikyouiku-no Jissen" (Kuroshio Publishing) in February 2015 .

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：音声教育　自己モニター　教材　実践研究　moodle　誤用分析　国際情報交換

１．研究開始当初の背景

日本語音声教育は，他の分野と比べ，遅れを取っていると言われることが多い。確かに，音声教育の方法は，以前とほとんど変わっていないように思われる。日本語音声教育では，日本語学習者の発音に問題があるとき，教師がモデル音声を発し，それをリピートさせる。それでも問題があるときは，発音の方法を説明したり，近似音を組み合わせるなどして教育を行うことが多い。しかし，実際には，あまり効果がなく，あきらめてしまうことが多い。そこでは，学習者は何をしていいか分からず，教師もモデル音声の提示と発音の説明という，悪い意味での学習者任せが起こっているといえる。

また，日本語音声教育研究についても，英語話者，中国語話者，韓国語話者の日本語音声の誤用を母語の干渉という観点から分析するものが多い。しかし，それらの研究は，実際の現場にはほとんど役立っていないようである。

そこで，我々は，悪い意味での学習者任せではない音声教育の方法として，自己モニターを活用した音声教育を提案し，研究を進めてきた。しかし，それが十分に普及しているとは言いがたい。その原因として，実際に音声教育に携わる教師の技能不足があるのではないかと考えた。

２．研究の目的

(1)自己モニターを活用した音声教育を行う際に，教師にはどのような技能が必要なのかを大学院生の日本語音声の教育実習を通して明らかにする。さらに，それらの知見をもとに，実際に教師に研修を行い，その研修成果を明らかにする。

(2)必ずしも教師で関与しなくてよいように，自己モニターを活用した音声教育のための e-learning 教材を開発する。さらに，それを試用し，さらなる開発を行う。特に，そこで収集された独自の基準を他の学習者に提示することが有効かどうかを検証する。

３．研究の方法

(1)まず，先行研究などにより，日本語学習者が誤りやすい日本語音声を抽出した。次に，それらの音声が含まれるミニマルペアとなる単語のリストを作成し，実際に，日本語学習者（中国語話者，韓国語話者，英語話者，ベトナム語話者，タイ語話者，アラビア語話者，ポルトガル語話者，インドネシア語話者）に読み上げさせ，各言語話者が誤りやすい音声を明らかにした。また，母語の特徴についても調査し，どのような原因があるか，主に対照研究によって明らかにした。

次に，実際に，自己モニターを活用した音声教育のための e-learning 教材を開発し，それを試用した。

また，ブレンディッドラーニングとして，教室内で，自己モニターを活用した音声教育を行う教師の技能の問題点を分析し，その研修方法などを明らかにした。

４．研究成果

(1)先行研究などにより，日本語学習者が誤りやすい日本語音声を抽出した。次に，それらの音声が含まれるミニマルペアとなる単語のリストを作成し，それを試用した。そのころで，そのリストが有効であることが分かった。従来は，英語話者，中国語話者，韓国語話者の誤用に関する研究がほとんどだったが，比較的，日本語学習者の多い，ベトナム語話者，タイ語話者，アラビア語話者，ポルトガル語話者，インドネシア語話者の日本語音声の誤用を収集することができ，今まで断片的だった，各母語話者の音声的な問題を一覧できるようになった。これにより，母語によらない各音の難易が容易に分かり，音を扱う順序などを考える際の参考とすることができる。

また，各母語話者の音声的な問題のみでなく，母語の音声の特徴を調査し，それを図書で示した。このことで，教師に対照分析の材料を与えることができた。さらに，各言語話者のための練習方法を示した。それの方法は，唯一絶対の方法ではないため，扱いには慎重を要するが，従来，付け焼刃的な方法しかなかった矯正方法に対して，教室での音声教育の具体的方法のいくつかを教師が持つことができた。

(2)自己モニターを活用した音声教育のための独学用の教材を作成した。これは，e-learning 教材であることから，ネット環境さえあれば，いつでもどこでも，どれだけでも練習することができる。従来の教室での音声教育では，時間的な制限などから，「もっと聞いて練習したい」「もうできるようになったから，次の練習をしたい」などということが集団での学習ではなかなかかなわなかったが，それらが可能となった。

さらに，言い分けについては，自身の音声を容易に録音し，それを何度でも聞くことができ，また，教師に簡単に送ることができるようにしたため，自身の音声とモデル音声を比べることが容易にでき，学習者の気づきの能力が向上した。

(3)本研究の中心である，自己モニターを活用した音声教育では，目標音について，「こういうことに気を付けて発音すれば，できる」という，教師などに教えられたわけではない，各学習者が持っている「独自の基準」が重要である。例えば，「ジョは舌が下がっている感じで発音する」「ゾはその前に，小さくンと言うと発音できる」などである。今回，e-learning 教材を試用することで，正しく発音できるようになった学習者の，多くの独自の基準を収集することができた。さらに，これら収集した独自の基準を，発音ができない学習者に提示することで，正しく発音できるように場合があることが観察され，つまり，

他の学習者の独自の基準を提示することが有効な場合もあることが分かった。ただし，これは常に有効とは限らないので，よりよい提示の仕方などを今後，考えていく必要がある。
(4)独学用教材を開発したが，教室を含めた，ブレンディッドラーニングが必要である場合やそれを望む学習者もおり，教室で，教師が自己モニターを活用した音声教育ができることは重要である。その際に問題になるのが教師の技能やビリーフなどである。そこで，大学院生の音声教育実習を撮影し，その問題点などを分析した。それらをもとに，現役教師などに研修を行い，その効果を分析した。その結果，技能のほかにビリーフの問題なども見られた。また，特にビリーフについては，音声教育に限らないビリーフの問題も見られた。そこで，自己モニターを活用した音声教育の理念や具体的な方法の紹介のほかに，音声教育関するビリーフや日本語教育全体に関するビリーフについても図書の中に掲載した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）
①河野俊之，超級話者のアクセントとルール，日本語教育方法研究会誌，21-1，2014，2，査読無
②河野俊之，母語の発音の痕跡がなくなるための音声教育の実践，日本語教育方法研究会誌，20-2，2013，2，査読無
③河野俊之，音声教育における実践の共有，日本語教育方法研究会誌，20-1，2013，2，査読無
④河野俊之，小河原義朗，自己モニターを活用した音声教育における発音チェック，日本語教育国際研究大会　名古屋 2012　予稿集，2012，1，査読無

〔学会発表〕（計　１１件）
①河野俊之，超級話者のアクセントとルール，日本語教育方法研究会，横浜国立大学，2014 年 3 月 15 日
②河野俊之，単純名詞のアクセントは１つひとつ個別に覚えなければならないか，沖縄県日本語教育研究会第 11 回大会，琉球大学，2014 年 2 月 22 日
③河野俊之，母語の発音の痕跡がなくなるための音声教育の実践，日本語教育方法研究，20-2, 2013, 立命館アジア太平洋大学, 2013 年 9 月 21 日
④河野俊之，超級になるための音声教育の実践―ビデオチャットを用いて―, 2013 年度日本語教育学会研究集会　第４回，北海道大学，7 月 6 日
⑤河野俊之，音声教育における実践の共有，日本語教育方法研究会，東京大学，2013 年 3 月 10 日
⑥河野俊之，自己モニターを活用した音声教育のためのｅラーニングの開発，第５回「日本語教育とコンピュータ」国際会議，名古屋外国語大学，2012 年 8 月 21 日
⑦吉峰晃一朗，文野峯子，齋藤ひろみ，河野俊之，浜田麻里，実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ－実践の共有化のあり方を探る，日本語教育国際研究大会　名古屋 2012，名古屋大学，2012 年 8 月 19 日
⑧河野俊之，小河原義朗，自己モニターを活用した音声教育における発音チェック，日本語教育国際研究大会　名古屋 2012, 名古屋大学，2012 年 8 月 18 日
⑨河野俊之，学習者自身で発音を直す教育―自己モニターを活用した音声教育―，2011 年度第２回日本語教育巡回研修会（招待講演），交流協会台北事務所・文化ホール，2011 年 9 月 7 日
⑩河野俊之，学習者自身で発音を直す教育―自己モニターを活用した音声教育―，2011 年度第２回日本語教育巡回研修会（招待講演），麗加園邸酒店，2011 年 9 月 6 日
⑪河野俊之，学習者自身で発音を直す教育―自己モニターを活用した音声教育―，2011 年度第２回日本語教育巡回研修会（招待講演），文藻外語学院，2011 年 9 月 4 日

〔図書〕（計　１件）
①河野俊之，音声教育の実践，くろしお出版，2014，288

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://e-learning-service.net/
j-pronounce.com/

６．研究組織
(1)研究代表者

河野　俊之（KAWANO, Toshiyuki）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：60269769

(2)研究分担者
小河原　義朗（OGAWARA, Yoshiro）
北海道大学・留学生センター・准教授
研究者番号： 70302065

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：